

タキイのダイコン栽培マニュアル

地域	月	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
冷涼地	夏どり			●	●	■	■						
	秋どり					●	●	■	■				
中間地	初夏どり	●	●		■	■							
	秋冬どり						●	●	■	■	■	■	
暖地	初夏どり	●	●	■	■								
	秋冬どり						●	●	■	■	■	■	■

適期表記説明

- : タネまき
- : 育苗期
- : 生育期
- : 収穫期
- : 適宜播種可能

ダイコンの発芽と生育

発芽適温 20～25℃（最低温度4℃、最高温度35℃）

生育適温

幼苗期…主根、側根、茎の伸長最適温度は28℃、最高限界は36℃で、最低は主根が2℃、側根は5～6℃、茎は5℃です。

生育初期…平均気温24℃前後で、24℃以上の高温にもよく耐えます。-3℃以下になると葉のねじれや凹凸、株の枯死などが起こり、温度の低下にともなって側根も太くなります。

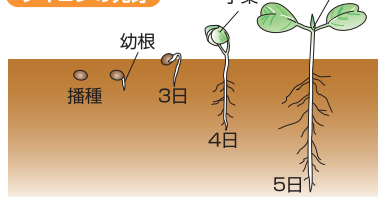
生育中期…平均気温25℃以上の高温は、根部肥大を抑制します。

生育後期…平均気温17～21℃、地温16℃前後で直根の肥大がすぐれます。病虫害や生理障害の発生が少なく、栽培しやすいのは平均気温で15℃前後。平均気温が23℃を超えると生育抑制や生理障害の発生が懸念され、25℃を超えると生理障害や病害が多発します。

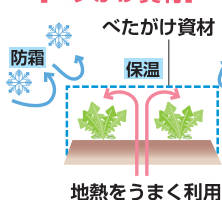


ダイコンの発芽

ダイコンの発芽



【ベタかけ資材】



地熱をうまく利用

低温期の栽培で有効なのが、ベタかけ資材です。播種後からベタかけをすることで、①寒さによる被害が軽減 ②抽苔をある程度防ぐ ③生育が促進 などの効果があります。ベタかけ資材はとても軽く、植物体に直接かけることができ、扱い方がとても簡単です。ただし、はすすタイミングを間違えると、軟弱徒長になったり、葉勝ちになって肥大が悪くなったり、蒸れて病気が発生する原因となります。

ダイコンの花芽分化と抽苔

【ダイコンの花芽分化】

種子が吸水し動き始めた時から低温に感応して花成が誘起され、花芽分化します。一般に-1℃～13℃の範囲で感応し、品種によって異なりますが敏感なのは5～7℃とされています。晩抽系の品種は低温は変わりませんが、低温遭遇時間の要求量が多くなります。花芽分化後は、高温長日条件で抽苔（トウ立ち）が促進されます。

【脱春化作用（ディバーナリゼーション）】

夜間の低温感応を日中の高温で打ち消す作用で、20℃以上の高温が必要で、高温が4～6時間以上確保できれば完全に脱春化されます。ただし毎日の反復が大切で、昼間温度が上がらない日が3～5日も続くと花芽分化を起こし、その後は逆転しません。



ダイコンの花

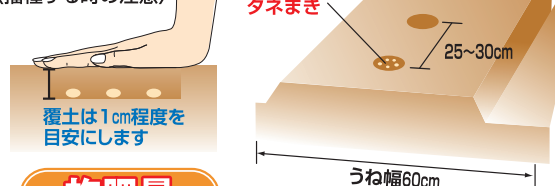
春まき栽培はトンネルやマルチを使い、生育初期の昼間は温度を高めに！



トウ立ちが起こりやすいタネまき時から、本葉5～6枚ごろにかけて、昼間5～6時間ほどを25～30℃程度に保ち、花芽がでにくいように管理します。低温に感応し、花芽を作ろうとする際、昼間の温度を高くすれば、その動きを打ち消すことができます。

【土づくりが大切】 十分な耕土（50cm以上）が確保され、排水性と保水性が両立できる土づくりが必要です。肥沃で膨軟な地力のある土が栽培に最適です。深耕するとともに、元肥は夏季では播種の5～7日前、冬季には14～20日前には施用し、十分耕起して、土になじませておきます。うね全体に適当な水分を確保しておきます。

〈播種する時の注意〉

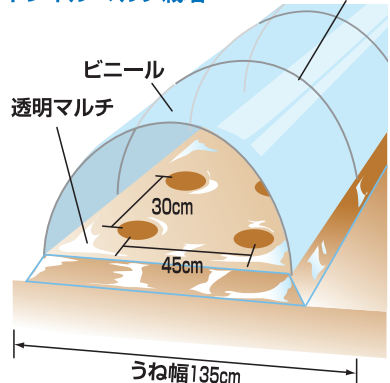


施肥量

元肥は目安として10㎡当たり成分量でチッソ100～200g、リン酸150～200g、カリ100～200gを施用します。気温が高くなる時期の作型は生育が早いので、チッソ成分を100g以下にして生理障害や割れを防ぐようにします。ダイコンは土づくりが重要なので、うねを立てる前、完熟堆肥とともに「バイオダルマ」などの菌体肥料をあらかじめ施用すると品質が向上します。

播種

トンネル・マルチ栽培



本葉7枚以降は、昼間の温度が30℃以上にならないようにトンネルのすそを開け、換気する。25℃を目安にする。収穫が近くなると20℃ぐらいに下げる。

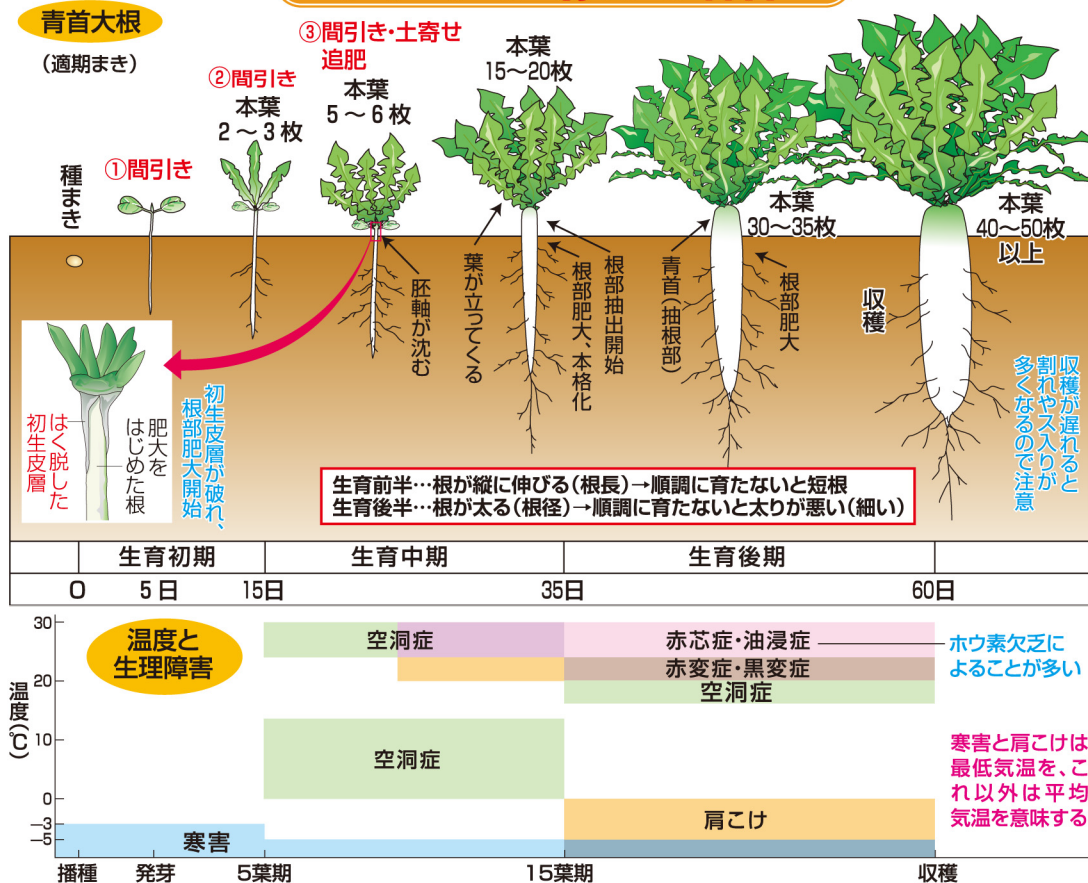
春まき

抽苔を防ぐには保温資材が大切…マルチによる保温性は、露地＜白黒ダブル＜シルバー＜黒＜グリーン＜透明の順番で高くなり、抽苔の危険性が低くなります。また不織布のベタかけも保温効果が高くなります。さらに保温性が高いのはトンネル、ハウス栽培となります。夜間の地温を高く維持できるほうが、良いものを収穫できます。トンネル、ハウスの容積を大きくし、被覆資材をより保温性の高い素材に変えるとさらに秀品が期待できます。



ダイコンのトンネル栽培

ダイコンの生育と生理障害



【ス入り】

根の中に起きる異常の一種で、内部の細胞が老化現象を起こし、白色でスポンジ状の組織になります。通常、収穫が遅れた場合に発生します。根の肥大の際に、同化産物の供給が伴わず、内容物のない細胞・組織ができて起こる一種の飢餓状態とも考えられます。多肥条件によっても促進され、高温時の生育が旺盛なものにも多く見られます。



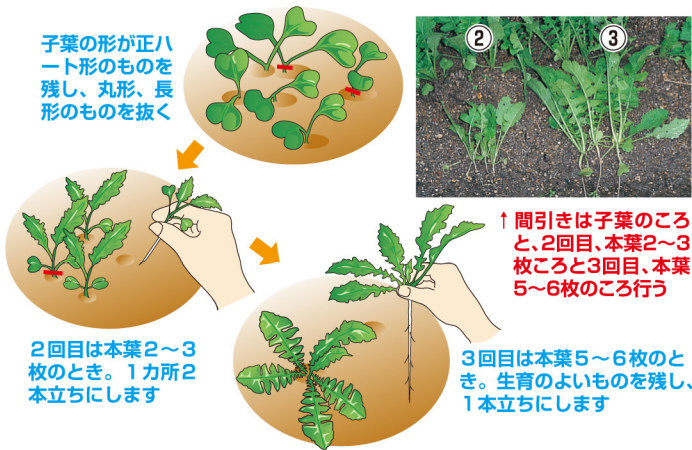
【空洞症】

肥大の切替え時期が原因。初生皮層をはく離させること(播種後15~25日)、根の中心部に数mmの空洞が発生しますが、栽培環境が悪化すると、細胞の肥大充填が十分行われず空洞となります。高温や低温、水分、肥料のバランスのくずれなどで発生します。適温、適湿を保持することが大切になります。



間引き

ダイコンの根の長さは生育初期でおおよそ決まります。本葉5~6枚までの生育初期を適湿に管理し、順調に肥効を進めることで、生育が促進されることが期待できます。極端な乾燥や過湿では、うまく育ちません。



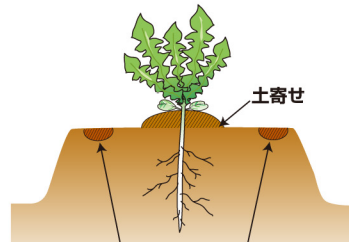
追肥と土寄せ

【土寄せ】降雨後の乾燥などで、うねの表面がたかくなった時などは、条間を浅く中耕し、根に空気を送ることも大切です。また、葉が徒長して株が安定しない時や、台風などの強風の時には、株元に土を軽く寄せます。

【追肥】追肥は生育の様子を見ながら、3回目の間引きの終わるころに行います。1回につきチン成分で10㎡当たり20~30gを目安に。追肥後、株元に土寄せと軽く中耕します。追肥の遅れは、葉の出来具合や裂根につながりやすいので注意します。肥料が多すぎると葉勝ちとなり、曲がりが増え、青首の発言が弱まったり、尻づまりが悪くなります。



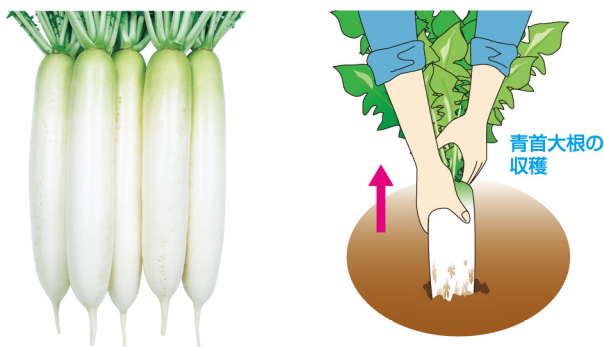
↑ 追肥は本葉5~6枚のころに行うとよい。同時に土寄せするとよいでしょう



追肥はうねの肩部に施用する

収穫

根の直径が7cm程度になったら収穫できます。根元を持って、ゆっくりと引き抜きます。白首ダイコンなど吸込み系ダイコンの場合は、ショベルなどでまわりの土を崩してから引き抜くと折れずに収穫しやすくなります。ビタミン類がいっぱいの葉も、捨てずに食べるようにしましょう。



ダイコンは土づくりが大切!



「ダイコン十耕」というくらい、土づくりと深耕が重要です。発芽して直根が真っすぐに地中へ伸びる時に、先端の生長点が土塊や肥料に当たったり、乾燥などで傷むと又根になります。輪作体系の中にエン麦やライ麦などの緑肥作物を導入することで、土壌の通気性や排水性を保持するなどの土壌改良効果があります。またネグサレセンチュウを抑制する効果も期待できます。